

佳作

まほうの言葉

兵庫県神戸市立魚崎小学校五年 川島綾音

私はすなおになれない勝気な性かくだ。なので、すぐにけんかを売り買ひし、自分が負けたと認めたくないで謝らず、友だちと気まずい関係になってしまう。

そしてとうとう、がまんならなくなった。友だちと公園で遊んでいて、お腹がすいたのでだがし屋にいったときのこと。

「ねえ、ひとつおかしおごってよ。」

と、いつてきたのだ。当然、いいわけもなかった。なんたって、学校で決められているのだ。「お金のやりとりはいけません」と。そのことを無視していることになんとかなくカチン、ときてしまった。そして、

「学校でいわれてるでしょーあんだ、ばっかじゃないの!？」

とってしまった。本当はこんなこといいたくなかったのに。口がそうさされているように、勝手に動いてしまったのだ。でも、そんなのもたんなる「言い訳」。はっと口元をおさえたが、おそかった。顔を真っ赤にして、くやしそうに顔をゆがめて、友達が消えてしまったのだ。私もなぜかあふれでる涙をこらえて、家に帰った。

家にはお母さんしかいなくて、アイロンを静かにかけていた。

「お帰り、はやかっただね。」

何事もなかったかのような元気な声だった。くやし。私はあんなめにあつたというのにつ。なんだかくやしさをこらえきれなくなったせいかな、少しあらく、さげびぎみになりながら、さっきのことを全て話した。お母さんはため息まじりに聞き入ってただ、ど、やがて、

「どっちも悪いわねえ。」

と言い始めた。なんだか怒る気にもなれなかった。

「あのね、そういう時はまほうの言葉よ。」

「まほう？」

え、なにそれ、と思った。まほうって何なの。

「ありがとう。」

いきなりお母さんにいわれた。てれくさくて、何も言えなかった。でも、うれしかった。

「ほら、てれた。うれしくなったでしょ。これがま

ほうよ。明日、謝っておいで。」

まほうにおどろきながら、私はうなずいた。

次の日、けんかした友達のクラスに行き、気持ちをこめて、

「ごめんね。」

といった。すると友達はこう返してくれた。

「ううん、私もごめんね。」

どきん、何かのしよげきがきた。うれしくて、幸せで、顔が熱くなった。ゆるしてもらえるって、仲直りできるって、こんなにうれしいんだ。

それから、私はたくさんの人にまほうの言葉を使い、まほうをかけた。まほうの言葉を使うと、だれもが幸せになれるから。私がすなおになれたのも、まほうの言葉のおかげだ。